

シニア世代の認知予防へ  
「ゲーム性」「わかりやすさ」の融合が高く評価

# 脳トレゲーム「egger」制作 コンペティションでグランプリ受賞



理工学部情報工学科の学生4人が快挙

グランプリ受賞を喜ぶ情報工学科の学生4人。左から尾林郁海さん、児玉海斗さん、生田智也さん、木原康生さん▲

シニア世代の認知予防、脳年齢の活性化などを目的に、2022年11月に開催された「第4回全国電子工学系学校ゲーム制作コンペティション」（脳トレゲーム制作コンペティション）で、理工学部情報工学科の学生4人のチームが、最高賞のグランプリを受賞した。

コンペティションの対象は高齢世代がPCで遊ぶことのできるゲーム。4人の作品は、ゲーム性の高さとともに、操作などのわかりやすさを重視した点が高く評価された。4人は「デザインや発想力など、さまざまな面で満足のいく作品を作れた。でも、まさか一番になれるとは」と驚き、グランプリ受賞を喜んでいる。

## 頭の体操が可能なゲーム「egger」

グランプリを受賞したのは、情報工学科4年(受賞時3年)の木原康生さん、尾林郁海さん、児玉海斗さん、生田智也さんの4人。

受賞作品は「egger」と名付けられた「頭の体操」的な要素の強いゲームで、さまざまなジャンルのクイズに正解すると、親しみのあるデザインのキャラクター「ゆでたまごくん」が画面の奥へと前進していくという比較的シンプルな仕組み。思考力と反応時間のスピードに着目して制作したという。

著作権などの関係でゲーム画面を紹介できないのは残念だが、体験者のスコアをランキング形式で表示し、競争を生むことで、「繰り返しチャレンジしたい」というゲームへの「依存性」を高めた。実際に何度も挑戦する人がいて、この作戦は奏功。作品への評価にも結び付いた。

4人の作品は、ほかのチームの作品と比べて「ゲーム性」「わかりやす

さ」のバランスに秀でていた。また、生田さんが「アイデアが素晴らしく、ゲーム性の高い他校の作品には驚きもあった」、児玉さんが「ゲームに専門的に取り組んでいるチームと競い合えてうれしかった」と振り返ったように、コンペティション自体を楽しめたという。

## 過去の大会映像も分析し対策「自信作」で栄冠

過去の大会の映像を分析し、中

高年の世代だけでなく、子供も来場することに気付いた。どの世代も楽しめるコンテンツにしようと、「ゆでたまごくん」を設定した。体験者が増えることを予想して、ブースには主催者が用意したPC2台に加え、独自に2台を増設し、盛況だった。制作の早い段階で、幅広い年齢層の来場を把握したことも“勝因”の一つといえる。

応募は、リーダーの木原さんが2022年春、後楽園キャンパス6号館で開催告知のポスターを見たことがきっかけ。役割を分担して本格



的に制作に着手し、8月の1カ月間で完成した。4人でアイデアを出し合い、「満足のいく自信の作品」(木原さん)に練り上げた。

尾林さんは「アイデアを伝え合う積極性が大事だと学んだ。社会人になればチームで活動する機会も増えるし、今回の経験が生きてと思

う」と話す。グランプリ受賞とコンペティション決勝大会での経験は、4人の今後の学修や活動の励みにもなったようだ。

## グランプリを受賞した 情報工学科の学生4人の担当と役割

**尾林郁海さん** 画面上のデザインをわかりやすくしたり、操作方法を整えたりできるUI(ユーザーインターフェイス)と、音響を担当。ゲームに適したBGMを選ぶのに苦心したという。

**木原康生さん** メインプログラム全般担当。デザイン以外の、ゲームの骨格や仕組みをつかさどる全てを担当。「わかりやすさ」「ゲーム性」の両立に力を注いだ。

**児玉海斗さん** 道路や建物など背景を画面上に配置するマップ担当。3D上でゲーム制作を可能とするソフトウェア「unity」で、フリーの素材を探すのに苦労したという。unityは3年前期の情報工学科の授業「画像コンテンツ演習」でも使用した。

**生田智也さん** キャラクターデザイン、全体のアニメーション担当。キャラクターの「ゆでたまごくん」の“生みの親”。どの世代からも「かわいらしいキャラクター」と評価されたことに充実感を覚えている。



▲コンペティション前夜祭での一枚



## 260校が参加、予選を勝ち抜いた13校の頂点に

全国電子工学系学校ゲーム制作コンペティション(脳トレゲーム制作コンペティション)は、若年世代の才能の育成と、シニア世代の認知予防、脳年齢活性化を目的に始まった。4回目の今回は全国の電子工学系の大学、専門学校260校が参加し、予選を勝ち抜いた13校が2022年11月5日に名古屋市ポートメッセなごやで開催された決勝大会で作品を発表した。各ブースで実際にゲームを体験した一般の来場者が審査員となり採点した。一般社団法人日本電子機器補修協会の主催。



# 自動車部が 全日本学生自動車運転競技 男子団体優勝



全日本学生自動車運転競技選手権で優勝し、部員らの笑顔が弾けた=2022年11月20日▲

自動車部が2022年11月の全日本学生自動車運転競技選手権大会（三重・鈴鹿サーキット）で男子団体を制覇した。全日本クラスの学生大会での団体優勝は2019年の全日本学生ジムカーナ選手権以来3年ぶり。2021年度の前回大会で団体4位に終わった悔しさを晴らし、男子個人でも2選手が優勝を飾った。水口来夢主将（商4、優勝当時3年）と、副主将の渡邊知成選手（商4、同3年）の2人に、優勝の喜びや自動車競技の魅力などを聞いた。

## 選手権で



「男子小型貨物の部A」で優勝した渡邊知成選手（前列中央）を囲んで▲

# 渡邊知成選手、尾形莉欧選手は個人戦も制覇 モータースポーツの魅力 「非日常的なエンターテインメント性」

## 出場選手全員が活躍

大会では、男子小型乗用の部(A・B)、男子小型貨物の部(A・B)のそれぞれの出場者が同じ車両に乗り、運転技術と走破タイムを競った。A、Bはコースの違いで、中大は小型貨物の部Aで渡邊選手、小型貨物の部Bで尾形莉欧選手(国際経営4)が優勝。小型乗用の部Aで水口主将が2位、小型乗用の部Bでは中

村優斗選手(法3)が3位に入り、ポイント制の団体優勝を勝ち取った。

水口主将と渡邊選手、尾形選手は前回の2021年度も出場したメンバー。水口主将は「前回はミスが多くて勝てなかった。その苦い経験を生かし、今回こそ優勝しようという意気込みで挑み、皆が活躍してくれた」と笑顔で振り返る。渡邊選手は「(優勝は)一年で最もうれしかった瞬間でした。個人の優勝もうれしい

が、主将の努力やチームへの献身が報われて本当によかった」と、水口主将への感謝の思いを口にした。

## 自動車部OBからの “秘伝” 「見えないラインを 感覚で攻略」

勝因やコース攻略の決め手を尋ねると、渡邊選手は「細かな車両の

## ☆全日本学生自動車運転競技選手権大会

一辺が5.2～6メートルの正方形のエリア(ボックス)内での転回、切り返しの技量や、クランクやS字、狭路のスラロームなどでの正確な運転技術が求められ、複数のボックスが設けられた周回コースの走破タイムを争う。コース上では、たとえば「ボックスに車両のフロントから入り、この位置にリアから止め、リアからボックスを出る」などといった規定通りに走行し、エリアを仕切るラインにタイヤが触れたり、疑似に設けられた缶を踏んだりすると減点となる。

図形や形を意味する「フィギュア」と呼ばれるモータースポーツで、舗装路コースを競技車両が単独で走行するタイムトライアル「ジムカーナ」、専用ダート場(未舗装路)でタイムを競う「ダートトライアル」との3種目の総合点で順位を競うのが全日本学生自動車連盟年間総合杯(全日本総合杯)となる。

動きに対する自分自身の認知の早さ」を挙げた。コースのボックス内のラインや、疑似の缶の位置を見定めるスピードを意味するという。

車両左側に設定されたラインや缶は当然、右ハンドルの運転席からは見えないか、見えにくい。その攻略について「動かしたり止めたりする際、車両右側の位置をまず定めることで、(左側を)感覚で攻めていくことが大事」と語る。自動車部OBから教えられたこの攻略法が大会でも効果を発揮したという。

幼少期からレーシングドライバーになりたかったという渡邊選手は「中大の選手として出場することがモチベーションの一つ」とも語り、水口主将は「協賛企業との交渉

だったり、メカニック担当だったり、運転そのものには興味がなくても続けられる部活動です」と大勢の入部を歓迎する。

## 全日本総合杯の獲得へ「大学ラストイヤーを楽しむ」

2人が最上級生となった2023年度は、大会連覇とともに、ジムカーナ、ダートトライアルを含めた3種目の総合ポイントで競う「全日本学生自動車連盟年間総合杯」(全日本総合杯)の獲得を目指す。自動車部が最大の目標に掲げるタイトルだ。

渡邊選手は「ハンドルを回す速さはどの学生にも引けを取らない」

と自負している。「通常の一般道路では見られない車の動きに触れることができるのがモータースポーツの面白さ」とも語り、非日常的なエンターテインメント性を魅力に挙げる。「リザルト(結果)を求めながら大学のラストイヤーを楽しみたい」と、期待に胸を膨らませている。



全日本学生自動車連盟競技選手権大会の男子団体優勝を喜ぶ水口来夢主将(右)と渡邊知成選手▶

## ■2022年度全日本学生自動車連盟競技選手権大会(11月20日、三重・鈴鹿サーキット)

### 〈男子団体の部〉

大学名	総得点	小型乗用A	小型乗用B	小型貨物A	小型貨物B
① 中央大	350	80	70	100	100
② 早稲田大	330	100	100	70	60
③ 慶應大	310	70	80	80	80
④ 立教大	255	60	65	65	65
⑤ 広島大 (上位5校)	211	65	41	55	50

### ▼自動車部のジムカーナの車両



### 〈男子小型乗用の部A〉

- ① 中野龍太(早稲田大)
- ② 水口来夢(中央大)
- ③ 小野徳馬(慶應大)

### 〈男子小型乗用の部B〉

- ① 柳内滉洋(早稲田大)
- ② 後藤正太郎(慶應大)
- ③ 中村優斗(中央大)

### 〈男子小型貨物の部A〉

- ① 渡邊知成(中央大)
- ② 菰田千也(慶應大)
- ③ 近藤怜(早稲田大)

### 〈男子小型貨物の部B〉

- ① 尾形莉欧(中央大)
- ② 渡辺龍之信(慶應大)
- ③ 宮田晃希(青山学院大)

(成績は全日本学生自動車連盟のサイトより抜粋)

# 茗荷谷、駿河台、小石川 都心に新キャンパス

## 文理融合型の 教育・研究が進展



駿河台キャンパスの模擬法廷



### ☆駿河台キャンパス

地上20階・地下1階建て、延べ床面積1万5639平方メートル。教室、模擬法廷、大会議室、図書室などを備えている。JR御茶ノ水駅から徒歩3分、東京メトロ御茶ノ水駅徒歩6分・新御茶ノ水駅徒歩3分。



小石川キャンパス体育館

### ☆小石川キャンパス

2階建て、延べ床面積1509平方メートル。体育館と付属棟で構成。公式バスケットコート1面、バレーボールコート2面の広さ。天井高さは梁下7.5メートル。



### ☆茗荷谷キャンパス

地上8階・地下2階建て、延べ床面積約3万3500平方メートル。大教室、研究室のほか、生涯学習の場としての文京区の地域活動センター、保育所、郵便局、カフェを併設している。立地は東京メトロ茗荷谷駅から徒歩1分。

都心における中央大学の新しい学修拠点となる茗荷谷、駿河台、小石川の3キャンパスが開校した。

茗荷谷キャンパス(文京区大塚)には法学部が移転。駿河台キャンパス(千代田区神田駿河台)は駿河台記念館を建て替え、専門職大学院法務研究科(ロースクール)と戦略経営研究科(ビジネススクール)の教育・研究施設となるほか、卒業生で組織する学会の本部機能も備える。小石川キャンパス(文京区春日)は体育館と学生の交流のための多目的室などの機能を持たせている。

法曹養成のさらなる充実とともに、東京メトロ丸ノ内線で直結する後樂園キャンパス(理工学部)や、近隣の市ヶ谷田町キャンパス(国際情報学部)とあわせ、法学系と理工系が連携した文理融合型の教育・研究の進展が期待されている。